

# リーマン面に関する length multiplicity の分布

橋本康史 (九州大学)

e-mail: hasimoto@math.kyushu-u.ac.jp

$\mathbb{H}$  を複素上半平面,  $\Gamma$  を  $\Gamma \backslash \mathbb{H}$  の体積が有限になるような  $SL_2(\mathbb{R})$  の離散部分群とする. そして,  $\text{Prim}(\Gamma)$  を  $\Gamma$  の素な双曲的共役類の集合,  $N(\gamma)$  を  $\gamma \in \text{Prim}(\Gamma)$  の固有値の大きい方の二乗とし,

$$\text{Norm}(\Gamma) := \{N(\gamma) \mid \gamma \in \text{Prim}(\Gamma)\},$$

$$m(N) := \#\{\gamma \in \text{Prim}(\Gamma) \mid N(\gamma) = N\}$$

とおく. すると, セルバーグ跡公式やセルバーグゼータ関数を使って, 次のような漸近公式 (素元定理) が得られる.

$$\sum_{\substack{\gamma \in \text{Prim}(\Gamma) \\ N(\gamma) < x}} 1 = \sum_{\substack{N \in \text{Norm}(\Gamma) \\ N < x}} m(N) \sim \frac{x}{\log x} \quad \text{as } x \rightarrow \infty.$$

しかしながら, 各  $m(N)$  に関しては, 現在のところ  $\{m(N)\}_{N \in \text{Norm}(\Gamma)}$  が有界でない (Randol, 1980) こと以外はよくわかっていない. 本講演では, このような  $m(N)$  の  $N$  に関する増大度の評価をするとともに,  $m(N)$  の平均的な挙動や増大度の一様性をみるために,

$$\pi_\Gamma^{(k)}(x) := \sum_{\substack{N \in \text{Norm}(\Gamma) \\ N < x}} m(N)^k$$

の  $x \rightarrow \infty$  に関する増大度を調べたので, その結果を紹介する. まず (co-compact とは限らない) 一般的な  $\Gamma$  に対しては次のような結果を得た.

**定理 1.**  $\Gamma$  を  $\text{vol}(X_\Gamma) < \infty$  なる  $SL_2(\mathbb{R})$  の離散部分群とする. このとき, 任意の  $\epsilon > 0$  に対して次が成り立つ.

$$\begin{aligned} m(N) &\ll N^{3/4} \quad \text{as } N \rightarrow \infty, \\ \pi_\Gamma^{(2)}(x) &\ll x^{5/3+\epsilon} \quad \text{as } x \rightarrow \infty. \end{aligned}$$

$\Gamma$  が  $SL_2(\mathbb{Z})$  の合同部分群の場合,  $m(N)$  が原始的な不定値二元二次形式の類数を使って記述されるので, 類数分布に関する既知の事実を利用すると次のような結果を得る.

**定理 2.**  $\Gamma$  を  $SL_2(\mathbb{Z})$  の合同部分群とする. このとき, 任意の  $\epsilon > 0$  に対して

$$N^{1/2-\epsilon} \ll m(N) \ll N^{1/2} \log N \quad \text{as } N \rightarrow \infty$$

が成り立つ. また,  $k \geq 2$  に対して,

$$\pi_\Gamma^{(k)}(x) \sim c_\Gamma^{(k)} \text{li}_k(x^{\frac{k+1}{2}}) := c_\Gamma^{(k)} \int_2^x \frac{dt}{(\log t)^k} \quad \text{as } x \rightarrow \infty$$

をみたすような定数  $c_\Gamma^{(k)} > 0$  が存在する.